



TITLE:

挨拶

AUTHOR(S):

井村, 裕夫

CITATION:

井村, 裕夫. 挨拶. 京都大学高等教育研究 1997, 3: 122-123

ISSUE DATE:

1997-10-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/53508>

RIGHT:

挨拶

井村 裕夫（総長）

ご紹介をいただきました井村でございます。本日は、年末でしかも日曜日であるにもかかわらず、第3回教育改革フォーラムに多数の方々のご出席いただきましたことを、たいへんうれしく思っております。本日はまた、遠いところから国立教育研究所の喜多村先生と慶應大学湘南藤沢キャンパスの井下先生においでいただき、講演いただくこととなりました。両先生に大学を代表いたしまして厚く御礼申し上げたいと思います。

皆様ご承知のように、文部省の大学審議会の中に将来構想部会というものがございます。この部会は、日本の高等教育の規模につきまして、将来構想をまとめ、概要を発表いたしました。ここでは、すでにもう新聞にも出ておりますので御存知であろうと思いますが、これから18才人口が急速に減少していくなかで大学の規模はどのくらいが適切であるのかについて、議論がなされました。ご承知のように、18才人口は今後どんどん減りまして、平成21年には底になり、120万という数になります。かつて220万あったわけですから、およそ半分まで減少するわけです。

平成2年・3年には、いわゆる第二次ベビーブームのために、臨時増員、臨時定員をおよそ11万人設けました。この臨時定員をどうするのかということも、一つの大きなテーマでありました。けれども、私立大学の経営の問題等に配慮しまして、最終的には臨時定員の半分の、恒常的に定員化して残す、およそ5万5千人を残すことになりました。これも含めて文部省が、今後の見通しを試算しているわけですが、その試算によりますと、平成21年の底をつく頃には、大体志望者は全部大学に入れてちょうど100%ぐらいになるという、ある意味では楽観的な見通しになります。

しかしこれには、いろいろ前提があります。まず、高校卒業生の64%ぐらいが大学に志願することが、前提になっています。とすれば、進学率は18才人口の57%か58%までいかないということになります。この通りになるかどうか予測はできませんが、わが国の大学が極めて厳しい状況に立ち向かうことは、確実であります。定員割れをおこしてくる大学もかなり出てくると、予想されるわけであります。そうした中で、大学が今後どうあるべきかということが、非常に大きな問題であります。

おそらくそれぞれの大学は、それぞれに個性を発揮し、それぞれ特長のあるカリキュラムを提供し、そのカリキュラムに適した学生を迎え入れる。そういう努力をしない限り、生き残ることはできない。そういう時代が来るのであらうと思います。本日の「大学教育の個性化」あるいは「大学の個性化」という問題は、これからのわが国の大学にとりまして、最も重要な課題の一つであります。このことは、疑いはございません。11月20日から私は東京大学の吉川総長と国立大学協会の数名の方と、イギリスの高等教育の視察に行き参りました。およそ10日ほど駆け足旅行をして参りました。多くの目的がありました。現在、イギリスの高等教育への政府からの支出が大変抑制されておりまして、大学は厳しい状況にある。イギリスの大学は、この限られた資源をどのように有効に使っているのか。抑制から生じる問題を、どのようにして解決しているのか。また、元々イギリスには極めて個性的な大学が多いのですけれども、そういった個性を今後どのように維持していこうとしているのか。そういったことを見たいということが、主要な目的でございました。そのすべてについて今お話することは、もちろんできませんけれども、本日の主題である個性化と絡めて少しだけ述べてみたいと思います。

現在、イギリスの高等教育への出資は、政府から Higher Education Funding Council というところへ、ブロックマネーで支出されます。Higher Education Funding Council は、各大学を評価しております。つまり、教育・研究の両面で評価をいたしまして、その評価に基づいて大学へお金を出します。大学の方は、ブロックマネーでそれを受け取り、大学を運営するわけです。もちろん、日本の科学研究費のような、リサーチカウンスルもありまして、そこへ応募して研究費を獲得するという道もあります。それから、産学協同も極めて活発でありまして、産業界からも相当な資金を受け入れております。しかしもっとも主要なお金はやはり、給与も含めまして Higher Education Funding Council から出てきているわけであります。

このカウンスルは、今申し上げましたように、一定の基準で教育及び研究の評価を行っております。このことがイ

ギリスの高等教育にどのような影響をもたらすのか。すなわち大学の個性を殺してしまうのではないかと、そういう不安をもつわけでありまして、現にイギリスで出会った学者の中にも、そういう心配を述べる方もございました。しかしいろいろな方にお会いして、大学も6つほど訪問して参りましたが、やはりイギリスの方は、あまり人の真似はしないという精神が、伝統的に旺盛であります。それぞれが、与えられた環境の中で、最大限個性を発揮しようという努力をされている。このことを痛感しました。

たとえば、ロンドンのダウタウンに、これは昔のポリテクニクスでありますけれども、現在はウエストミンスターという大学ができております。そこの学長さんにお会いしましたところ、「私どもはケンブリッジのような大学をめざしてはいない。私どもはしかし教育面では、ケンブリッジに負けないように努力をしたい。」とおっしゃいました。教育へ大きくウエイトをかけ、重視しておられるわけです。現に Funding Council から参りますその大学へのお金を見ますと、何よりも教育面に大変たくさんのお金が参っております。そのことが、あとで調べてみて分かりました。

それぞれの大学はそれぞれの置かれている条件、伝統、歴史、そういったすべてを踏まえながら、個性を発揮していく。そういう努力がなされていることに、私はやはり、強い感銘を受けたのであります。これに比べますとどうしても、日本の大学は個性に乏しいと、いわねばなりません。しかし先程も申し上げましたように、これから18才人口が減少していく中で、それぞれの大学はそれぞれの個性に合わせて、あるいは個性を発揮して、学生を引きつけていけないといけないのではないかと私はそう考えます。たとえば、今後、いわゆる成人の学生、社会人の学生をどのようにして大学へ引きつけるのか。あるいは、どういう特別なカリキュラムを、大学は準備できるのか。こういうことが、大変大きな課題になるだろうと思っております。本日は、これから2人の先生に講演をしていただきます。そのあと、皆さんとともに、真剣にディスカッションしていただきまして、本日の会議を実りあるものにしていただきたいと思います。そのように念じまして、私の開会の御挨拶を終わらせていただきます。